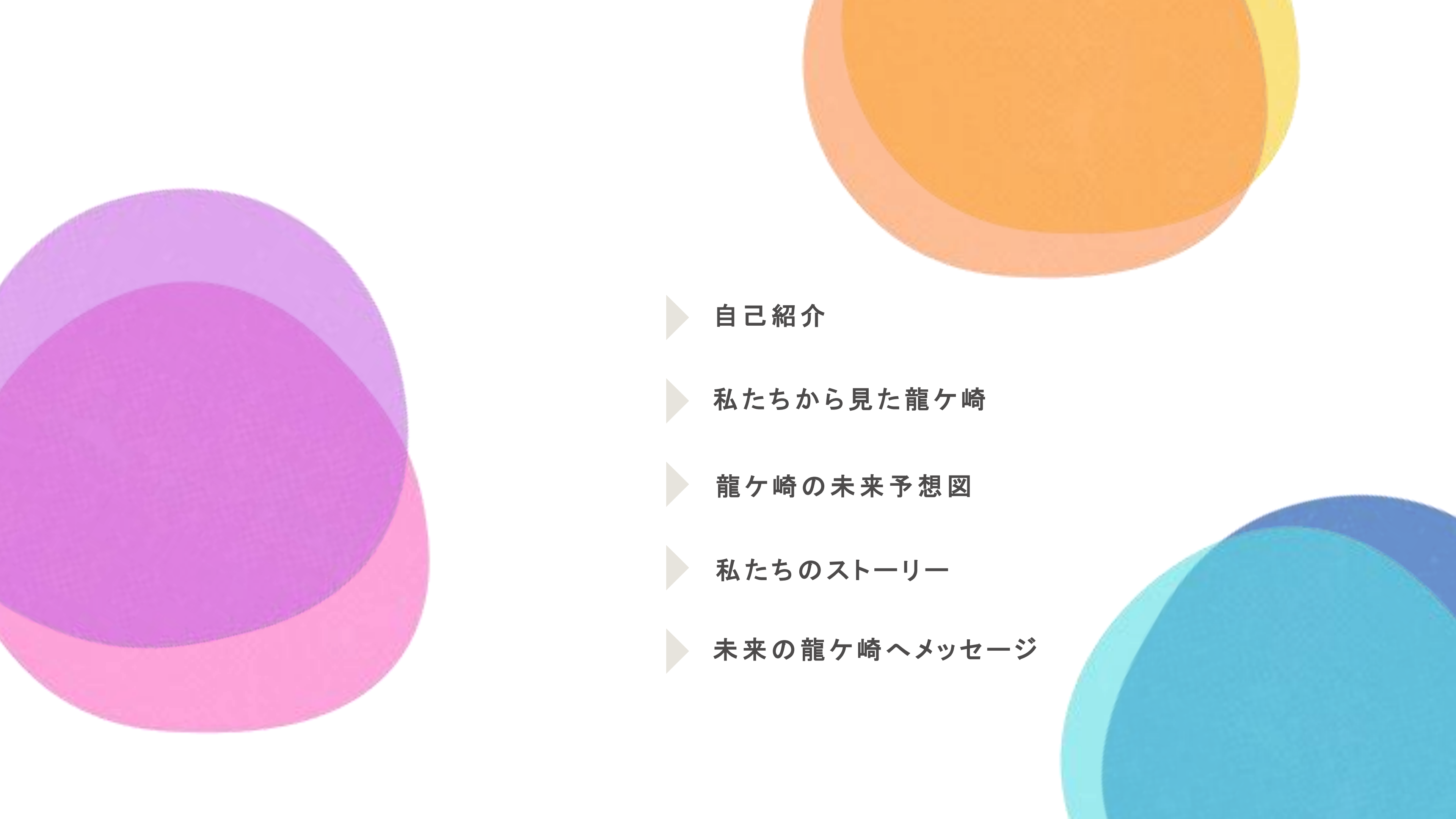


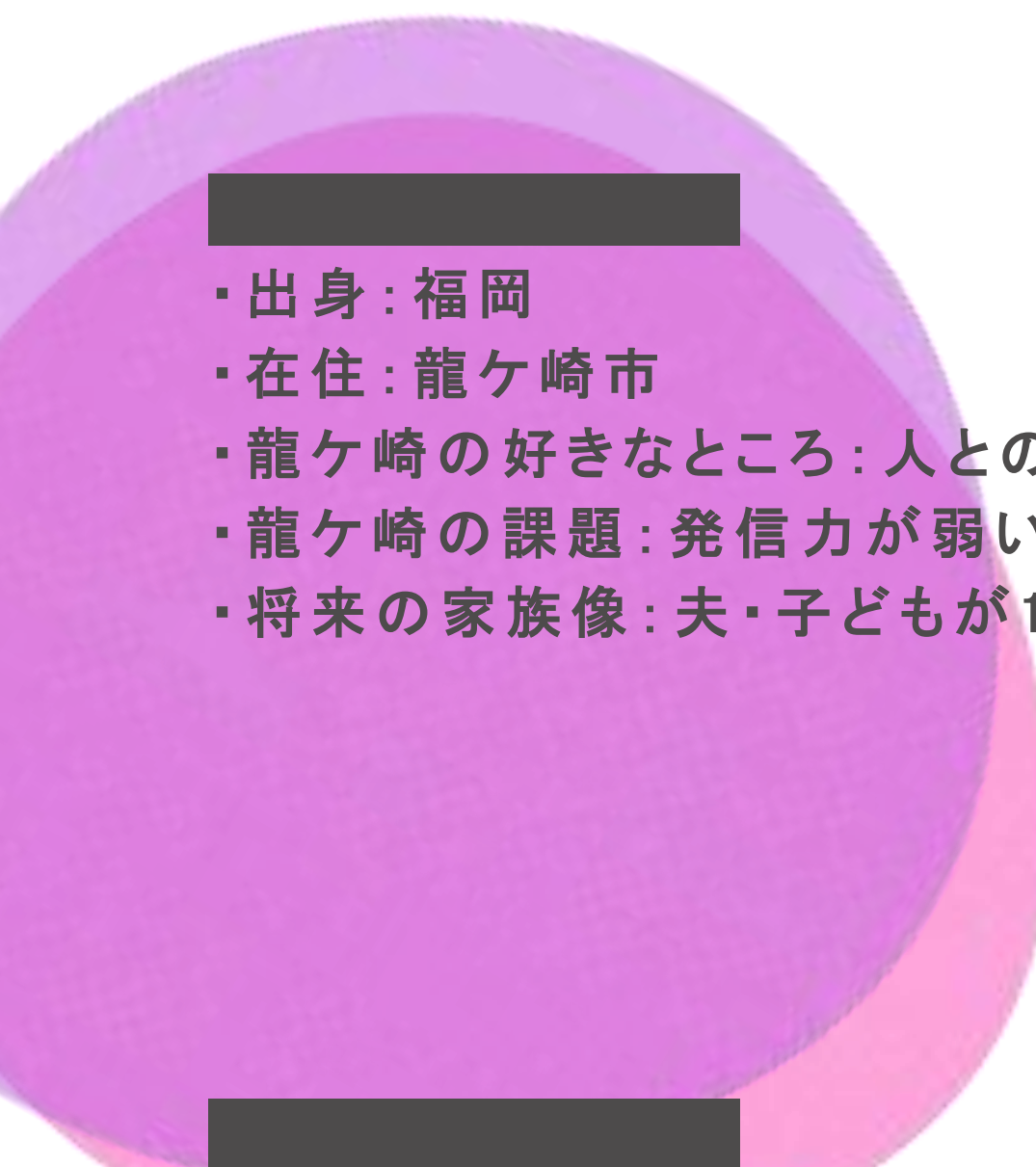


龍ヶ崎にいずれ戻ってくる 未来予想図

presented by
龍ヶ崎にいずれ戻りたいグループ

- 
- ▶ 自己紹介
 - ▶ 私たちから見た龍ヶ崎
 - ▶ 龍ヶ崎の未来予想図
 - ▶ 私たちのストーリー
 - ▶ 未来の龍ヶ崎へメッセージ

01_自己紹介

- 
- [Redacted Name]
- ・出身：福岡
 - ・在住：龍ヶ崎市
 - ・龍ヶ崎の好きなところ：人との距離が近い空気がきれい
 - ・龍ヶ崎の課題：発信力が弱い・・・
 - ・将来の家族像：夫・子どもが1人か2人

- [Redacted Name]
- ・出身：龍ヶ崎市
 - ・在住：龍ヶ崎市
 - ・龍ヶ崎の好きなところ：自然が豊かで落ち着きがある
 - ・龍ヶ崎の課題：商業施設が少なく、あまり活気がない
 - ・将来の家族像：今のところ考えていない

- [Redacted Name]
- ・出身：龍ヶ崎市
 - ・在住：龍ヶ崎市
 - ・龍ヶ崎の好きなところ：自然が多いところ、スーパーが多い
 - ・龍ヶ崎の課題：道路の整備
 - ・将来の家族像：夫、子が1人か2人



未来の龍ヶ崎へ私たちからメッセージ

「育つ、働く、笑う。
自分らしく生きる場所、龍ヶ崎。」

02 私たちから見た龍ヶ崎

良いところ

- ・子育て支援が充実している
- ・首都圏のアクセスが良い
- ・土地が安くマイホームが建てやすい
- ・せかせかしてない。ゆったりしている
- ・自然豊かで、環境が良い 空気がきれいで星がきれい

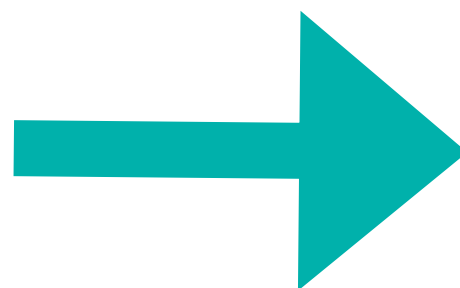
改善点

- ・バスの本数を増やしてほしい
- ・駅前にお店が少ないので友達と遊ぶ場所がない
- ・関鉄竜ヶ崎駅周辺も商業施設がほしい
- ・旧市内にスーパーが少ない
- ・良いところがいっぱいあるのに宣伝力が弱い(アピールが足りない)

03_龍ヶ崎の未来予想図

未来に望むこと

- 大きい病院
- 自転車が安全に通れる道
- 駅ビル、駅近の保育園がほしい
- 竜ヶ崎線の本数を増やしてほしい
- ニュータウンだけでなく、竜ヶ崎駅付近にも商業施設を建てる
- アイエフを復活し、映画館や本屋、楽器店を作る
- オンラインの趣味のサークルを作る
- 敷地内に保育園があるマンション
- 屋根、ベンチ、ジャングルジムがあって監視員がいる公園。



そのためにできること

- 若い人が企画に参加して、自分の街としての関わりを持てるようにする
- 人が集える場所を作る。子どもが安心していられる場所。そこに気軽に話せるカウンセラーがいる
- 人との関わりが持てる集い
- さんさん館を日曜日にも開設すると
もっと子育て支援が充実する
- 市民がインスタで龍ヶ崎をPR

04_未来story



プロフィール

- ・ 名前・年齢 武藤 爽香 22歳
- ・ 将来の職業 都内のOL 図書館司書の資格は保有している
- ・ 将来の家族構成 夫と子ども2人(男の子と女の子1人ずつ)
- ・ 趣味・将来の夢 楽器演奏、ボランティア

Story

■5年後 (27歳)

都内の出版社に勤めて5年目。図書館司書の資格は取ったものの、実際にはデスクワーク中心の毎日。残業続きで、休日は家で寝て終わる。音楽が好きで、大学時代の仲間と時々スタジオに入るが、心のどこかで「何のために働いてるんだろう」と思う日も増えた。そんなある日、同級生がSNSに「龍ヶ崎で地域音楽フェスをやる！」と投稿。子どもたちがバンド演奏して、大人も参加できる手作りイベントらしい。「いいな、こういうの。」少し羨ましくなった。都会の雑踏の中で忘れていた何かがふと心に浮かんた。龍ヶ崎にいた頃は、空気がきれいで星が見えた。実家から届いた野菜を見て、「お母さんの味噌汁飲みたいな」と少しだけ胸がきゅっとする。でも自分には関係ない世界だと思っていた。

04_未来story

■10年後(32歳)

29歳で結婚し、30歳で長男が生まれた。最初は幸せいっぱいだったが、育休後に職場復帰すると現実の壁。保育園の送り迎え、家事、仕事。夫も協力的だが、毎日が嵐のよう。公園は近くにあるけど、自然の少ない街で「子どもにもっと広い空を見せたいな」と思うようになる。ある日、SNSを観ていると偶然「龍ヶ崎LIVE配信チャンネル」が流れた。地元の若者たちが配信する動画で、「牛久沼ランタン祭り」の光が夜空に浮かぶ映像に釘付けになった。コメント欄には「帰りたい」「懐かしい」「きれい！」の声が溢れていた。その年の秋、実家に帰省したとき、駅前に新しくできた「交流施設Ryugasaki base」で、子どもたちがワークショップに参加していた。そこには若いスタッフやカウンセラーがいて、「安心して遊べる場所」を実現していた。爽香は思った。「この街、ちょっと変わったかも。」

■15年後(37歳)

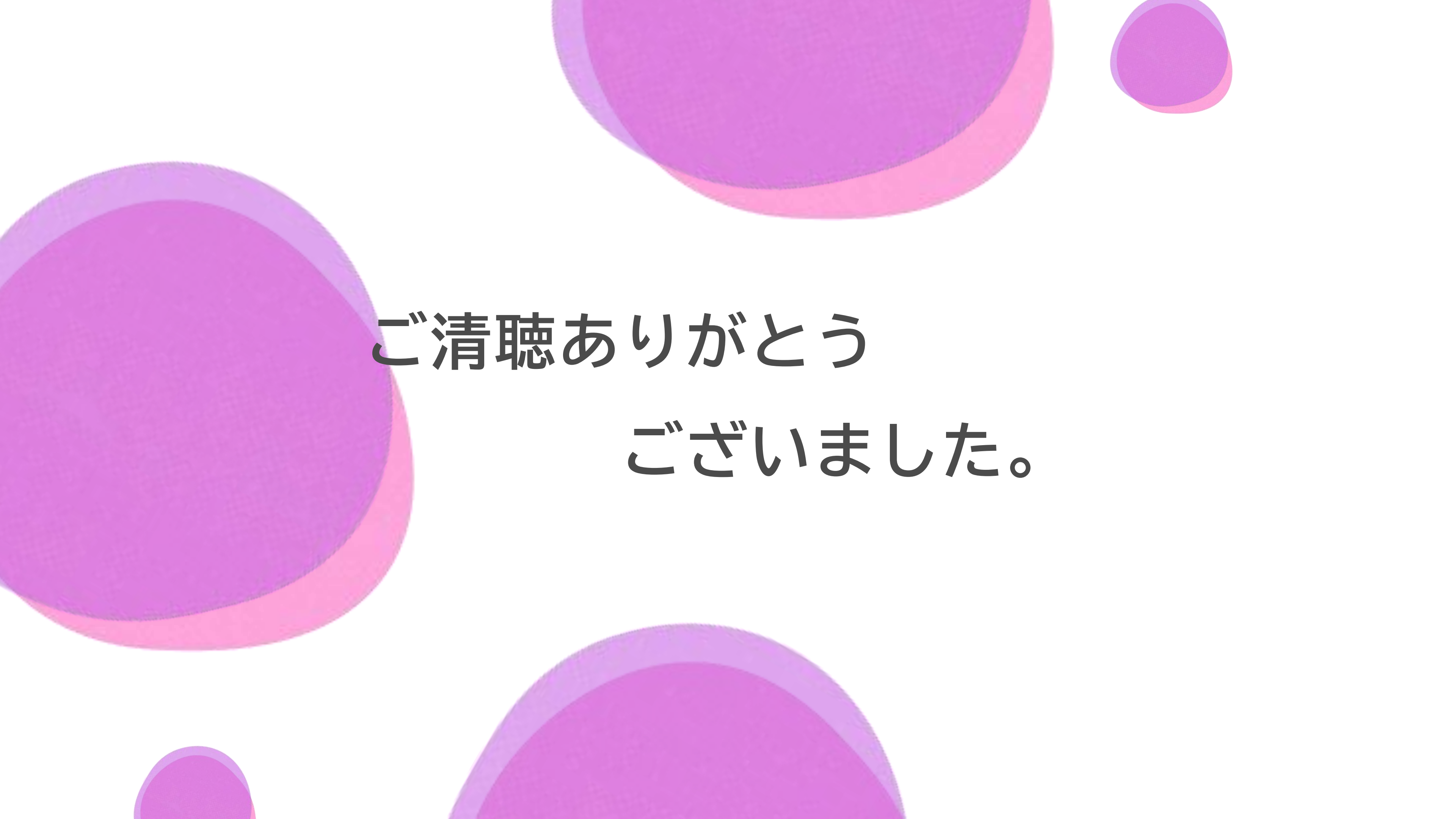
夫がつくばに転勤となった。都内での暮らしを続けるか、それとも地方でのびのびと暮らすか。迷った末に、家族で龍ヶ崎に戻る決断をした。実家の近くに、憧れだったマイホームを建てた。東京で払っていた家賃が嘘かのように、半分の価格で、広々とした庭付きの家を手に入れることができた。私は現在第2子を妊娠中。実家が近くにあることで今回の出産はとても安心感がある。長男は、毎週土曜日になると駅前のRyugasaki baseにできた「まちの学びルーム」に通う。地元の食材を使ったランチを楽しんだ後、友達とギター講座に参加する。そこは、年齢を問わずボランティアが支える“学びと交流の場”だ。爽香自身は、図書館司書の資格を活かして「たつこの図書館Ryugasaki base」のスタッフとして働くようになる。そこでは子どもたちと一緒に「地元の音楽フェスのアーカイブ展示」を作る企画を任された。帰り道、夜空を見上げた。そこには、東京では見えなかった満天の星。ふとつぶやく。「やっぱり、この街が好きだな。」

「龍ヶ崎」は、ただ生まれた街ではなく、人と人が関われる“安心の居場所”に進化する場所。爽香にとって、“戻る理由”は仕事でも便利さでもなく、「子どもたちに見せたい風景」と「自分が関われる温かさ」だった。

05_未来の龍ヶ崎へ私たちにメッセージ

「育つ、働く、笑う。
自分らしく生きる場所、龍ヶ崎。」



The background features several overlapping circles in shades of purple and pink. A large circle is on the left, a medium one at the top center, a small one at the top right, and two others at the bottom left and bottom center.

ご清聴ありがとう
ございました。